

一人ひとりがいきいきと学ぶ八坂っ子の育成

— 友達とかかわり合いながら、学ぶ意欲を高める —

山口市立八坂小学校

◎ 実践に当たってのポイント（担当者）
○ 授業評価の視点を設定し、友達とかかわり合いながら、学ぶ意欲を高める授業づくりをする。
○ くすのきタイム（朝の時間）の充実と基本的生活習慣の確立をすることによって、全教職員が、協働体制で学ぶ意欲を高める学校づくりをする。

1 学校紹介

校区は、佐波川の中流に位置し、南は出雲地区、北は柚野地区と境を接している。平成15年度に、三谷小、引谷小が本校に統合し、校区は八坂地区全体に広がった。

学校教育目標

ふるさとに学び「幹」を育てる

—くすの木しげる むすびの里—

人間尊重の精神を基盤とし、学ぶ力と豊かな心を身に付け、ふるさとの人や自然から生き方を学び自分の可能性を伸ばしながら夢を実現する心身ともにすこやかな児童を育成する。



2 研究内容

(1) 研究主題

一人ひとりがいきいきと学ぶ八坂っ子の育成

～友達とかかわり合いながら、学ぶ意欲を高める～

(2) 研究主題について

一人ひとりがいきいきと学ぶ八坂っ子とは、確かな学力を身に付けた子どもである。すなわち、自分で課題を見つけ、自ら学び主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力を身に付けた子どもである。

昨年度は、児童の学ぼうとする意欲を高めるための学習指導の工夫と改善を図ることと、〈読み・書き・計算〉などの学力の基礎をきたえ一人ひとりの学習能力を高めることをねらいとし、研究を進めた。その結果、子どもたち一人ひとりの基礎計算力の向上、集中力、持続力、自己肯定感の高まりなどの成果が見られ、学校全体に落ち

着きが出た。

一方、個の学力を高めると同時に、集団の力を生かし、かかわり合いながら共に学んでいこうとする子どもを育てたいという願いが明らかになった。そこで、

友達とかかわり合い、共に学ぶ楽しさがわかれば、学ぶ意欲が高まり、
確かな学力を育むことができるだろう。

という仮説のもとに、研究を進めていくことにした。

友達とかかわり合いながら共に学ぶ喜びを身に付けた子どもは、友達のよさを共感的に受け入れながら自分のよさも認識し、学ぶ意欲を高め、さらによりよい自分になろうと努力すると考えた。具体的には、友達と学び合う場を通して、自分に自信をつけ、「～ができるようになったのは～さんのおかげだ。もっと～なことをしてみたい。～のような自分になりたい。」と願い、次の課題に向かって努力する子どもの姿をめざした。

(3) 研究仮説実現への具体的な取組

友達とかかわり合いながら、学ぶ意欲を高める授業づくり

①実践のポイント

実践のポイントとして、授業評価の視点を設定し、全担任が授業研究を行った。

授業評価の視点は、単元のねらいから、子どもに身に付けさせたい力を具体的な姿として明らかにし、そのための手だてを授業評価の視点とし、授業者が決定した。授業後の協議会では、授業評価の視点をもとに、子どもの変容について手だてが適切であったか等を協議した。研究の視点・手だての例は、以下のとおりである。

○単元全体から

- ・子どもにとって魅力があり価値ある教材の選定
- ・学習活動の仕組み方の工夫
- ・意欲を高める学習環境の工夫
- ・子どもの思考の流れや反応を予想し、意欲を持続させる単元構成の工夫

○1時間の授業から

- ・本時のねらいと学習課題の設定、提示の仕方
- ・一人一人の考えのたせ方
- ・考えの取り上げ方やかわらせ方、学び合う場の設定
- ・教師の発問・言葉かけのあり方
- ・学習活動や板書の工夫

②実践事例 6年（算数・体積）

単元のねらい—めざす子どもの姿—実現のための手だて

体積の意味及び単位と測定について理解し、立方体や直方体など簡単な体積を求めることができるようにする。

仲間とかかわり合う場や学び合う活動を通して、自分なりに疑問をもったり、友達の考えのよさに学んだりできる子ども

○一人学びの時間をしっかりと、自分なりの方法をもたせるようにする。
○思考過程を式や言葉だけでなく、絵や図を用い考えを共有しやすくし、ヒントを出し合いながら、考えさせるようにする。
○子どもたち一人ひとりの思考過程を把握し、つぶやきを取り上げやすいようT・Tの指導形態をとる。

授業評価の視点

○教師の出方は適切であったか。子どもどうし話し合いを深める問いかけであったか。
○本時の課題は適切だったか。多様な考えが出るような図形にしたが、子どもにとってどうであったか。
○友達の体積の求め方に興味をもち、その求め方を考えようとしたか。
(子どもの姿から)

本時のねらい

複合図形の求積の式提示から、他の友達の式に疑問をもったり、ヒントを出し合ったりしながら、自分とは違う考え方を理解することができるようにする。

研究協議より

○教師の支援について

思考の焦点化、考え方の整理での教師の支援が重要である。

○課題について

多様な意見が出るような図形（数値の工夫）だったので、子どもたちは、いろいろな求積方法を考えることができた。

○友達のとき方に疑問をもち、進んでその求め方を考えようとしたことについて

事前にしっかりと時間をとり、一人ひとりが自分の考えをもっていた。

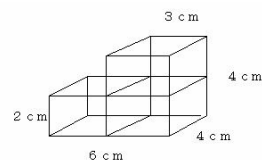
説明のための図や立方体を用意しておいた。

型分けをきちんと押さえて授業を進めた。

クイズ形式で友達の式の意味を考えていった。

クラス全体がお互いに学び合おうという雰囲気があった。

本時の課題



学ぶ意欲を高める学校づくり

子どもたちの学ぶ意欲を高めるために、以下のことに取り組んだ。

○くすのきタイム（朝の時間）の充実について

本校は、8時10分から40分までの30分間をくすのきタイム（朝の時間）としている。くすのきタイムでは、読書、計算、聴く・話すタイムを実施した。

くすのきタイムでの実践のポイントは、自己評価、相互評価をしながら、自分たちの成長を実感させることである。自己評価、相互評価をすることで、子どもたちは、できるようになった自分を自覚し、学ぶ意欲を高めることができた。

○基本的な生活習慣の確立について

「早寝、早起き、朝ごはんという生活習慣は、学力向上の原動力になるだけでなく、すべての原点。子どものうちに身に付けると一生の財産！」という合い言葉をもとに、生活リズムの

立て直しとして、「早寝→早起き」のリズムと朝ごはんを軸として、基本的な生活習慣の確立に取り組んだ。具体的には、学期1回の健康生活チェック表（8項目）や、学校保健委員会、保健指導等で自分自身の体と生活を見つめること、点検してみること、まわりの人と比べることで、生活のくずれを意識し、改善を図ることを目的とした。

実践のポイントは、実態からの出発である。子どもや保護者の実態・意見・感想・気づきを学校だより、保健だより等でみんなの課題として返し、共有した。その結果、「朝食は、いつもしっかり食べるのがよいと思います。」等の意見も増えてきており、食生活についての意識、関心が高まってきている。PTAでは、健康づくり食事会を立ち上げ、参加者も増えてきた。早寝、早起きについても意識化が進み、「自分で起きることができないから自分で起きたい。」という子どもの声も聞かれるようになった。

3 成果と課題

授業づくりでは、授業評価の視点を決めて授業研究することで、「こんな学力をつけたい。」「この単元ではこんな子どもを育てたい。」という授業者の願いと、そのための手だて（かかわり合い、学び合う場）についての話し合いが活発になり、一人ひとりの子どもの変容を大事にした学習活動が仕組めるようになってきた。また、子どもの具体的な姿を願いながら単元をつくっていくことで、教材や教具、単元構成、言葉かけなど、クラスの子どもの実態に応じた指導の工夫が随所に見られるようになった。

その結果、友達のよさを学び合い、取り入れながら、自分にいかしていこうとする子どもの主体的な学びの姿が見られるようになった。

学校づくりのくすのきタイムの充実では、一人ひとりに対する細やかな指導ができ、子どもたちの集中力・持続力・達成感・自己肯定感の高まりが見られた。そして、学習に向かう構えづくりもできてきた。また、聴く・話すことを続けることで、聴く、話す、考える、わかり合える楽しさも味わうことができるようになってきた。

基本的な生活習慣の確立では、生活アンケートなどの結果を子ども・保護者・担任に返すことにより、生活リズムの大切さに対する意識、関心、実践意欲への高まりが見られるとともに、外遊びする子どもが増え、排便状況もよくなってきている。反面、高学年については遅寝、TVゲーム時間が長い、自律起床がやや少ない子どもが多いなど新たな課題も見えてきた。今後も一人ひとりの健康問題に目を向け、保護者とかかわりながら基本的な生活習慣の確立をめざしたい。

研究を進めていく中で、子どもたちは、友達とかかわり合い学び合う中で、「学ぶことは楽しいことだ。」と実感し始めてきた。学力検査の結果は、昨年度より伸びてきてはいるが、思考力等が身に付いていないなど、子どもたちの学力の課題も明確になってきた。今後は、一人学びを大切にしながら個を高めると同時に、かかわり合い、学び合う場を通して、学級集団を高める授業改善に取り組んでいきたい。

主に、授業評価の在り方を研究し、日々の授業に積極的に取り入れ、学ぶ意欲を高める授業のさらなる工夫について研修を深めていきたい。

◎ 校長から見た指導のポイント

○「できた！わかった！楽しい！」と子どもたちが感じる授業の積み重ねが、子どもたちの「やればできる」という自信につながり、「こんなこともやってみたい」と主体的に学ぶ姿になるであろう。全教職員が、研修を共通理解、協働実践できたことが、大きな成果だと信じる。

○友達とかかわり合う中で、人前で自分の意見を堂々と発言できるようになったこと、学ぶ構えができたことは成果として認められる。しかし、一人ひとりの子どもの学力差は大きい。本校の子どもの実態から身に付けさせたい力は何かをしっかり見つめ直し、研究の視点を明確にして、今後研修をしていかなければならない。